



窯を開ける瞬間が楽しみ



窯の中で仕上がりを確認



元気いっぱいみなさん



できあがった竹炭を作業小屋に運ぶ。満足な出来に顔もほころぶ

は「稲田さんの年代しか窯づくりの技術を持ったものがない。この技術を受け継いでいくのも大切」と話します。

できあがった竹炭は

黒光りとかわいた音

11月27日、窯開けがありました。材料の竹を入れ、6日間焼き続け、その後、約3日間冷えるのを待ちました。

この日は、稲田茂さん、西村文作さん、青砥昭雄さん（福長）、柴田博さん（上菅）、水谷勉さんの5人が集まり、窯を開けました。

できあがった竹炭は、黒光りのするつや、たたくと乾いた音が心地良く響きます。

皆さん「今回のできは上々です」とていねいに炭を運び出していました。

集まる場所がある

囲炉裏を囲んで話を

休憩時間に話を聞くと「何度やっても難しい、だからやりがいがある。いつも挑戦する気持ちを忘れない」窯を開ける瞬間が一番ワクワクする」と試行錯誤の日々を振り返りながらその魅力を話してくれました。

また、元気の秘けつを聞くと「この年になってから、何かと忙しいわ。やりたいことがあるから、毎日が充実している」気の合った仲間が集まる場所があることが大切。ここに来て、好きなことをして、囲炉裏を囲んで話をすることが「楽しみ」と、仲間との楽しい時間を過ごすこと。このことが元気の源と話の中から感じました。

楽しみながら地域を活性化



西村文作さん（福長）

ここに来て、冗談や楽しい話をするのも楽しみの一つです。地域の特性を生かし、物づくりを通して活性化させていきたいです。やりたいこと、みんなが集まる場所があるから、メンバー全員が生きいきしています。